10/11（木） 小幡ゼミ
担当：月岡

『余剰の政治経済学』　沖公祐

1章　市場像の源流
・１７世紀以降の思想家たちの交換を巡る議論を検討することを通じて欲求を発点に据える市場像とは異なる市場像、すなわち、余剰を視軸とする市場像を析出する。本書全体にとって序論的な意味合いを持つ。

1節　奢侈に牽引される市場 ―ロックとヒューム
⑴欲求（want）と交換
問い：交換を引き起こす原動力は何か。
⇒人間の欲求という自明視されてきた答え

⇔スミスやそれに先行する思想家：人間の欲求と交換とは容易に結びつかない

ロック：貨幣のない世界では、人間の欲求の狭隘さ故に、欲求に基づいた交換は広範なものになり得ない
ヒューム；未開の時代に於いては、人々は与えられた生活に満足している為、さらなる欲求の充足を求めて交換を拡大していく誘因は存在しない
J・スチュアート：他人に労働が強制されない「自由人」は、限られた欲求が満たされれば、それ以上は働かず、その結果として物々交換も止む

〇欲求が交換に及ぼす影響
現代の経済学・・・欲求は無限であるが故に交換も無際限に拡大していく
ロック等・・・人間の欲求には際限があるため、交換が行われてもその拡大は制限される

⑵奢侈と欲望
〇欲望（desire）の位置づけ
・資本主義の勃興期にあって、従来の欲求とは別種の、質の異なった欲求を欲望と考えた
・欲求（want）とは、基本的に必要（need）に対する欲求（needs）のこと。それに対し、奢侈（luxury）とは、欲求に対する過剰。
⇒<u>欲望が交換の起動力をなす</u>

〇こうした考えの背景
・ロック：必要に対する欲求だけの世界＝貨幣のない世界では、交換は行われない。交換は奢侈的なものに対する欲望の下で初めて生ずる
・ヒュームにおける奢侈と生産の関係
技芸の洗練→奢侈に対する欲望が刺激される→奢侈獲得の為に「熟練skillと勤労industry」が高められ、より多くの「余剰 superfluity」が生産されるようになる

両者の共通点
①奢侈に対する際限のない欲望が交換を拡大させる。この無際限な奢侈に対する欲望自体もまた、交換によって喚起される。奢侈交換論。

②余剰を生産する能力の大きさは交換の拡大に於ける能動的な役割を担っていない。必要だけの世界に於いては、余剰が潜在的に存在したとしても、奢侈に対する欲望の不在故にそうした余剰は現実には生産されない。生産（供給）ではなく、奢侈に対する欲望（需要）が市場の発達を牽引する

2節　奢侈から必要へ —スミス
⑴市場像の転換
〇スミスの必要交換論
分業によって生じた必要の欠如（自らが必要とするもの全てを自身のみでは生産できない）を、交換を通じて「充填 supply」する。ここでは、「欲求 want」の有限性をスミスが前提している。
諸個人の労働生産力の差異が、個々人の持つ交換性向を現実化
＝社会的分業を現実のものとし、相互の必要物を交換するようになる。そして分業は労働者の生産力をも高め、初発の自足した状態を超える余剰を作り出すようになる。

〇必要交換論に基づく成長論
分業の拡大→生産力の上昇→余剰の増大→資本の蓄積→人口の増加（社会全体の欲求の拡大）→分業の拡大というスパイラル

〇分業は二重の意味で欲求を作り出す
・個人にとって・・・必要の欠如を作り出す
・社会全体にとって・・・欲求の総和を拡大する
→生産は供給要因としてだけではなく、需要要因としても捉えられていた

特殊：自分のための生産
一般：他人のため

〇交換論の焦点の移行
・地主などの富裕者から労働者（独立生産者）へと焦点をずらした

⑵マルクスのスミス批判
〇想定する社会への批判
・スミスの必要交換論が想定する社会が、独立生産者から成る単純商品生産社会（スミスのいわゆる「商業社会 commercial society」）であることを批判。すべての生産物が商業のための生産物として生産される社会を想定しなければならないと批判。

〇連続的歴史観への批判
個々人の持つ交換性向の「緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結」として「文明社会」を説くスミスの連続的な歴史観を批判。資本主義社会の成立は「生産者と生産手段の歴史的分離過程」を経なければならないと主張。

3節　単純流通としての市場 — マルクス
⑴生産と消費の捨象
・ 資本論冒頭では、生産（関係）と消費、更には階級関係が捨象されたため、マルクスが念頭に置いている筈の社会がどのような性格のものであるのか（マルクスが批判し

た筈のスミス的な単純商品生産社会なのか、全面的な商品交換が発達した階級社会なのか）ということが問題となる。
→マルクスは『資本論』では商品・貨幣論を単純流通（単純な商品流通、商品流通）として説いている。この単純流通では生産関係が捨象されている。

・ 必要と奢侈の区別は階級関係を通じて形成される歴史的産物として捉えていたために、資本−賃労働関係を捨象した冒頭商品論では、こうした区別も当然捨象される。

⑵単純流通論の限界
〇単純流通と資本の一般的定式の断絶
第二篇「貨幣の資本への転化」において説かれている、単純流通W-G-Wから資本の一般的定式G-W-G`への展開は、労働力商品の投入に依ったとしても、連続的なものではあり得ない。
→労働力商品が架橋するのはG-W-GとG-W-G`であり、単純流通と資本の一般的定式の間の間隙ではないから。

・冒頭商品論が単純流通論として展開され、「労働による領有」という現象が必然的であり、したがって、単純商品生産という現象は不可避的である。

⑶余剰の交換— ロック再考
〇重商主義の貨幣観
①貨幣を富と捉える重商主義固有の貨幣理解
②流通を単純流通に解消する古典派的な貨幣数量説

〇ロック独自の貨幣観
・ロックの奢侈概念は必要を超える余剰という原義に忠実
・腐敗の制約から免れている貨幣の貯蔵可能性を重視
・余剰と余剰の交換がなされる
・<u>無駄という否定的な意味しか持たない余り物を肯定的な余剰に転化される機制として交換に着目。</u>
→マルクスはロック同様、貨幣の貯蓄可能性に着目。しかし、そのことと単純流通論とは相反するものであり、最終的にロック的な視角を放棄したことは、蓄蔵貨幣や「命がけの飛躍」についての問題を喚起させることとなった。
→単純流通論は、商品交換を余剰を自分にとっての必要と交換するもの、とみなす。一方ロックは、否定的な余り物を肯定的に捉え返す契機として交換を見做した。この立場は市場の出発点においてすでに資本の萌芽が埋め込まれていると見ることに繋がる。 なぜ

〈補論〉宇野弘蔵の冒頭商品論
・冒頭商品＝単純商品説への批判
宇野の言う単純商品には、「単純商品生産社会に於ける商品」と、「歴史的単純商品」とがある。宇野が採ったのは、歴史的単純商品ではなく、資本主義的商品を抽象することによって、単純商品生産社会の想定へと繋がる回路を遮断すると同時に、そうして得られた商品形態が歴史的単純商品と共通性をもつことを指摘するという方法。

10/11（木） 小幡ゼミ
担当：月岡

これについての著者の疑問
①「古代社会、中世社会の商品」が社会の内部でなく社会と社会の接するところに生じると考える限り、その流通形式をW-G-W`として把握するのは適当でなく、また古代社会、中世社会の商品を単純商品と呼ぶことも同様に妥当でない。
②冒頭商品が資本主義的商品から抽象されるにも関わらず、流通形態としては、単純流通W-G-W`に基づいて展開している点。資本主義的商品から抽象された冒頭商品は、流通形態としては、歴史的単純商品（古代社会、中世社会の商品）と共通性を持つという主張の根拠になっているが、それを単純流通W-G-W`かの形式によって把握すべきではない。

論点：
①p19「生産関係が捨象された商品・貨幣論における単純流通W-G-Wは、単純商品生産における流通形式と同型である」という想定。確かに生産関係を捨象してしまえば形式的には同型だと言えるが、だからと言って、「冒頭商品論を単純流通論として展開するかぎり、・・・単純商品生産という現象は不可避的である」p22 ということにはならないであろう。

②p21 単純流通と単純商品生産が相即不離だ、という論証について。『原初稿』の「単純流通における領有法則の現象」を引いて説明しているが、何故、この「労働による領有」が単純流通においてだけ起こるのか、という説明になっていない。何故、資本主義的生産の下で「労働による領有」が起こり得ないのかということを論証しなければ、単純流通と単純商品生産が相即不離だとは言い得ないであろう。

③p27 貯蓄可能な耐久性のあるもの＝奢侈であるというロックの考えからすれば、消費の限界を超える余剰が作られる時点でそれは必然的に奢侈であって、貯蓄が念頭に置かれているものであるのだから、「ロックのそもそもの意図からすれば、消費の限界を超える余剰は無用の余り」である、ということにはならないであろう。従って、ロックの余剰交換論の意義が否定的な余りから肯定的な余剰への転換という点についても疑問が付される。

。ロックの貯蔵と G−W−G′は連続的につながるか？